



學會彙報

雑誌名	漢文學會々報
巻	3
ページ	83-86
発行年	1935-03-15
URL	http://doi.org/10.15068/00146679

學會彙報

孝經の研究

三井宇一郎

○昭和九年度漢文學科開講科目

公羊傳注疏(演習)

漢學師承記(演習)

經學に於ける特殊問題(支那の家族制度について)

禮記注疏(演習)

孝經注疏(演習)

尙書注疏(演習)

支那道德史

古代支那哲學史

日本漢文學史

支那文學概論

支那小説史

楚辭

合せて一單位

○本年度卒業生論文題目

孔子說話特に孔子家語の研究

易學史(古代より唐に至る)

荀子と經學との關係(先秦並に漢代經學上に於ける荀子の地位)

諸橋 教授

諸橋 教授

諸橋 教授

内野助教授

内野助教授

島田 講師

服部 講師

宇野 教授

安井 講師

鹽谷 講師

辛島 講師

石田 講師

相徳 定芳

小澤文四郎

竹倉 二郎

○本年度學會委員氏名

庶務部 小林信明

研究部 小島政雄、小澤文四郎、杉本重雄、下山田光平

編輯部 三井宇一郎、松村利行

會計部 小林信明、寺岡龍含

○春季講演會

昭和九年五月廿六日(土)午後一時より小島政雄氏司會のもとに

漢文學研究室に於て開かる。

講師 高師教授 石山脩平先生

演題 古典教育の價值とその方法

諸橋、内野先生を始めとして、聽講者六十有餘名、學會始つて以

來の盛況さ、爲めに文字通りに立錐の餘地これ無かりき、以てそ

の講演内容を推量せられ度し。尙ほ右内容は特にお願ひして別項

の如く上載するの榮を得た故、特に味讀を乞ふ次第である。終つ

て諸橋會長の閉會の辭あり、つゞいて茶話會あり。

○第九回研究發表會

六月十六日（土）雨、午後一時より漢文研究室に於て本年度最初の例會開かる。諸橋、内野、寺田先生を始め會員三十名の列席のもとに左の如き發表あり。

一、史記莊子傳考

學生 寺師龍含君

○秋季講演會

十月廿四日（水）午後四時より漢文學研究室に於て、去る廿日より一週間の豫定で支那小説史講義に遙々雞林の都より上京なされた講師辛島先生に貴重なる時間を戴いて左記の如き講演を拜聴するの榮を得た。諸橋會長先生を始めとして先輩、學生多數列席、頗る盛會であつた。

一、滿洲事變と中國文壇

本學講師 辛島 驍氏

右講演の内容を略述してみるならば、先づ現代の支那をみると鮮やかに白い國家（三民主義によるもの）と赤い國家（共產主義によるもの）との二つに色別けされてゐる事を知る。そしてこの白い國家の政府の下に動員されて出來たのが、民族主義文藝運動である。而して之は表向きは中國古典の再認識をスローガンとするものゝ國民黨組織部及び宣傳部の手先となれる文藝運動であつた。又之に刺戟されて大アジア主義的運動を鼓吹する文藝運動も起つたが、該運動は南京方面に於ける有力なる財閥をも動かして政府と金權の力によつて芽生え來れる左翼作家群に彈壓を加へ、彼等

をして地下にもぐらしめたのが滿洲事變直前の形勢であつた。かくする中に柳條溝のダイナマイトが支那文壇にも影響する様になつたのである。踏まれる姿は伸びるとの譬に洩れずやがて左翼作家によつて反帝國主義運動が起され、就中みるべきものにイデオロギッシュな女流作家の登場あり、演劇に小説に彼等はプロバガンダの爲めに汎ゆる運動を開始した。今特に事變を取扱つた作品をみるに、「最後之列車」「總退却」「大上海之毀滅」「齒車」「萬寶山」「暴風雨中之七人之女性」「亂鐘」等あり。之等によつて如何に支那のインテリ達は事變を眺めてゐるかをみるなら、何れも正鵠を得ず蒼白き乃至は小兒病的作家の觀念の遊戲にしかとれない。若きインテリは都會の灰色文明に、桃色の文學に世紀末的な反芻にあえいでゐる。故に若し此等のインテリを支那の指導者に推すときは、全人口の八割を占めてゐる農民は何處へ行くかと。洪水に早バツに、たま／＼農民に集る同情の涙は中間に於て搾取せられ、加ふるに政府は救農政策を施すでなし、たゞ「アキラメ主義」を注入してゐるのが現状であると。指導原理を失つた農民は何處へ行くか？ そこで天は僧族化せ、赤化せよ、然らずんば滿洲へ行けと。

我々は滿洲に理想的王道國家の實現を念願して止まぬ。一つには支那農民の爲めにも。又現代は一般に都會中心時代であるが、都市の背後に如何に悲惨なる農民があるかを改めて検討する必要はないだらうか、そして又我國に於ても農民こそ國を背負うて立

つべき存在であると。かくの如く滿洲事變を通して當時の支那文壇は如何にあつたか、又いかに動きつゝあるかを述べたのであるが、特に支那文學は色々の見地よりみねばならぬが、農民の狀態を克明にみることでより發足して行かねばならぬと。頗る現實生活に即したる方面よりお話しされたので大いに爲めになる所があつた。

○辛島講師歡迎會

十月廿四日(土)午後六時より茗溪會館に於てさゝやか乍ら辛島先生の歡迎會を開く。諸橋、内野、峯間、近藤、熊坂、森本、小林、寺田先生を始め先輩及び學生會員多數出席し、和氣満々裡に晩餐を共にして終る。

○第十回研究發表會

十二月一日(土)午後一時より漢文研究室に於て小澤文四郎氏開會の辭のもとに左記の如き發表あり。

一、釋奠考

學生 杉本 重雄君

釋奠の意義並に之が教育及び政治に及ぼせる影響を述べ、ついで古代より現代に至る迄歴史的に之が行はれ來れる狀態を略述せら

れた。

梗概を記するに現今に於いては孔子及び其の配享者を祀ることを釋奠と稱するが、元來はかく特定された名稱ではなくて、廣義に使用され、山川、廟、學校等にて行はるゝ祭典を云ひ、遂に唐太宗の時より孔子を先聖とし、顏回を先師とした。それが明朝に至りて、孔子を至聖先師と一連の名に改め、孔門の諸子及び儒教の道統者を配享する様になつた。

釋奠の本質は教育方面にあつて、師と學生との精神的連鎖が釋奠を通して、固く結ばれたものであつたが、後世に至り、國民が孔子を追慕し尊敬するのを利用して、政治的方面に用ひ、天下の民心統一の手段となしてしまつた。殊に漢民族以外の民族が支那中國を治めた如き時代には、盛大に釋奠を行ひ、標語として儒教の徳治主義を掲げて其の表れとして孔子を祀ると云ふ意味に行はれたのである。

釋奠は釋菜よりも其の禮重くして、牛羊豕を具へ、天子自ら出帥し、書を式後に講じ、樂も諸侯の用ふる六佾の樂を用ひ、清朝になつては前古未曾有の盛儀を現すに至つた。

支那國民と釋奠との離れることの出来ないことは、民國政府になつて釋奠など古き道德の表はれ、封建時代の遺物なりとして廢したが、最近に至りて人倫の亂脈を救ふ爲に孔子生誕祭の名目にて釋奠の實質を恢復したことも分る。

一、三年の喪服期間に就いて
 發表内容は別項に上載せる故精讀せられ度し。
 終つて諸橋會長先生より兩君に對する御高評あり、次いで茶話會
 後散會す。來聽者は會長先生を始め荻原、森本、寺田、金子、小
 林、田口先生、先輩、學生會員等三十名あり。

學生 竹倉 二郎君

○第十一回研究發表會

昭和十年二月二十三日(土)午後一時より第二會議室に於て九年
 度最後の例會。杉本重雄氏閉會の辭のもとに催さる。特に辭、喜
 壽に達せる大島老博士最近の研究の一部分を發表して戴いたこと
 は彌が上にも本會に光彩を與へた。そして發表内容は何れも別項
 に上載する榮を得た。

- 一、卦氣說に就いて 學生 小澤文四郎君
- 二、朱子の孝經判誤に就いて 學生 三井宇一郎君
- 一、元の韻の構造 文學博士 大島正健先生
 本學講師

閉會の辭を兼ねて諸橋會長先生より御批評あり。尙ほ小澤、三井
 兩君の研究は卒業論文の一部なる由。終つて茶話會。極めて盛會
 裡に了る。

昭和九年度會計報告

		收 入		支 出	
	前年度ヨリノ繰越金	七八・六一		通信費	五・七五
	會費	一〇三・〇〇		紙代	一・三四
	寄附金	三九・〇〇		學會茶菓代	七・〇〇
	學友會ヨリノ補助金	三五・〇〇		講師謝禮	一六・二〇
	特別收入	一・六〇		交通費	一・〇五
	合計	二五七・二一		小使手當	三・〇〇
				會報第二號出版費	一〇五・六〇
				合計	一三九・九四
差引残高					一一七・七二
					(二月末日調)